

甲賀の國づくりプロジェクト 水口岡山城発信事業

歴史フォーラム

「水口岡山城と豊臣家五奉行の城」

資料集



甲府城



丹波亀山城



水口岡山城

平成28年11月13日（日）甲賀市碧水ホール

主催 甲賀市教育委員会

共催 甲賀市郷土史連絡協議会 一般社団法人水口岡山城の会

歴史フォーラム

「水口岡山城と豊臣家五奉行の城」

日 程

開催日 平成 28 年(2016 年)11 月 13 日(日)

会 場 甲賀市碧水ホール

12 : 30 開場・受付開始

13 : 00～ 主催者挨拶

13 : 10～13 : 50 事例報告 1 「浅野長政の城 甲府城」
宮里 学 (山梨県教育庁)

13 : 50～14 : 30 事例報告 2 「前田玄以の城 丹波亀山城」
中居 和志 (京都府教育庁)

14 : 30～15 : 00 事例報告 3 「増田長盛・長束正家の城 水口岡山城」
小谷 徳彦 (甲賀市教育委員会)

15 : 00～15 : 20 〈休憩〉

15 : 20～16 : 30 フォーラム「水口岡山城と豊臣家五奉行の城」
コーディネーター 中井 均 (滋賀県立大学教授)
パネラー 宮里 学 (山梨県教育庁)
中居 和志 (京都府教育庁)
小谷 徳彦 (甲賀市教育委員会)

目 次

事例報告 1	「浅野長政の城 甲府城」・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	宮里 学（山梨県教育庁）	
事例報告 2	「前田玄以の城 丹波亀山城」・・・・・・・・・・・・・・・・	9
	中居 和志（京都府教育庁）	
事例報告 3	「増田長盛・長束正家の城 水口岡山城」・・・・・・・・	15
	小谷 徳彦（甲賀市教育委員会）	

浅野長政の城 甲府城

山梨県教育庁 学術文化財課
宮里 学

1. はじめに

県都甲府の玄関口にある「県指定史跡甲府城跡」(昭和 43 年指定)は、戦国武田家が滅亡した天正 10 年(1582 年)以降に織田信長、徳川家康の支配を経て、豊臣政権下、羽柴秀勝、加藤光泰、そして五奉行浅野長政とその子幸長(※)が支配した天正 18 年(1590 年)から慶長 5 年(1600 年)に築城された城郭で、築城当時の野面積み石垣が天守台、本丸を中心に良好に残っている。

※長政 5 万石、幸長 16 万石で、長政は五奉行として甲府には在勤していないと考えられる

甲府城跡の歴史的価値

- 1590 年代に築城された東日本における初期の近世城郭
- 甲斐国 21 万石の居城
- 築城期の野面積み石垣が天守台を中心に良好に残存している有数の事例
- 縄張りおよび曲輪の平面形態が築城期の姿を留めている
- 天守台を最頂部とした階層状の城郭景観
- 金箔付鯰瓦等の豊富な発掘調査出土品
- 城内各所に残り埋設保存されている石切場
- 線刻画や地鎮祭痕跡など築城祭祀に係わる特殊な遺構遺物

2. 地理的環境

甲府城は、盆地の北縁部の扇状地、沖積低地の境界付近に位置する。この付近は、沖積低地面と比高約 20~30m の小規模な丘陵が分布しており、甲府城はこのうち「一条小山」と呼ばれる独立丘陵に築城された。

3. 歴史環境

(秀吉の五奉行 浅野長政による築城まで)

甲府城は、鎌倉幕府開幕に向けて活躍するが、その過程で謀殺された一条忠頼の居館があったことに由来する独立丘陵「一条小山」に築城された。一条氏謀殺後は、死を弔うため一蓮寺が創建されるが、甲府城築城時に甲府市街地の南部に移転されている。このためか、城内の発掘調査では一蓮寺に関わる石造物が大変多く発見されている。

天正 10 年 3 月、甲斐国に侵入した織田信長・徳川家康によって甲斐武田家は滅び、信長は城代河尻肥前守秀隆を配したが、わずか 3 カ月後に起こる本能寺の変と同時に秀隆も討たれている。その後、天正 18 年、の豊臣秀吉により小田原北条氏が滅亡するまでの約 8 年間は徳川家康が平岩親吉を城代として甲斐を支配させた。

家康が江戸に拠点を移すと、甲斐は秀吉の支配となり、秀吉の甥である羽柴少将秀勝、天正 19 年（1591）には加藤遠江守光泰、文禄 2 年（1593）から慶長 5 年（1600）まで浅野弾正少弼長政とその子である浅野左京幸長が支配した。

（徳川將軍家の城として）

関ヶ原の戦い後、家康は甲斐に再度親吉を城代に命じつつ家康九男義直を配し、以降、二代將軍徳川秀忠の次男忠長、三代將軍徳川家光四男の綱重とその子綱豊（後の六代將軍家宣）が城主となった。

宝永元年（1704）からは五代將軍徳川綱吉の側用人で武田家旧臣の柳沢吉保と子の吉里が甲府城主となり、享保 9 年（1724 年）に柳沢家が和歌山に移封してからは甲府勤番制となり、江戸時代を通じて実質幕府直轄とされた城郭である。

4. 浅野氏築城の根拠となる出土品

発掘調査で検出された遺構にも築城期に比定される櫓建物の礎石群、建物遺構、煙硝蔵、井戸、地鎮祭痕跡および発掘調査による出土品は東日本の城郭のなかでも特に豊富な出土資料がある。

平成二年度からの舞鶴城公園整備に伴う甲府城跡内の発掘調査が始まるまで、甲府城築城者については明確な答えを得られぬまま、豊臣派と徳川派の学術論争であったが、発掘調査が進むにつれ、論争の答えとなる証拠の出土品が相次いだ。

特に、瓦に金箔が施されていた金箔鯨瓦等の発見は豊臣氏に築城であると決定付ける資料となった。

また、金箔鯨瓦の他に「五三の桐」あるいは「五七の桐」と呼ばれる秀吉の家紋をデザインした家紋瓦や、甲斐国を支配していた浅野家の家紋「違い鷹の羽」の鬼瓦も多く出土し、いずれも金箔が施されていた。

このように、城内からは甲府城跡を考えるうえで重要な発掘調査出土品が多くあり、築城期の様子については金箔鯨瓦や豊臣家と浅野家の家紋瓦が葺かれた建造物が多く建設され、その景観は浅野時代には完成していたことが解明されている。

5. 浅野氏が築いた野面積み石垣

甲府城跡において最も評価すべきは、築城期に構築された野面積み石垣である。

石材はほぼ全てが安山岩であり、築城された丘陵自体及び北東部に位置する愛宕山が石切場と判明している。

築石は横使いを基本とし、要所に縦使いを入れながら、目地には詰石を隙間なく施し、大小様々な石材を調和させ積み上げた石垣が良好に残る歴史景観は日本有数と評価されている。

江戸時代を通じて幕府直轄のため、他城郭と比べて石垣の修理がほとんどなく、天守台、本丸、稻荷曲輪周辺を中心に、築城期の石垣が今なお贅沢に残ったことが、最大の文化財的価値となっている。

甲府城跡の野面積み石垣の積み方には、大きく分けて乱積みと布積みがあり、布積み崩し（横目地は確認できるが布積みほど連続しない積み方）も所々に見られる。

隅角部については、慶長年間後半に築城された江戸城、名古屋城、大阪城に見られるような精加工石材を角石の材料とした算木積みと隅脇石を配する構造は見られない。

甲府城跡の隅角部は、石材の横使いが原則であるが、縦使いの石材を意図的に配石したり、連続性が認められない部分的な算木積みといったような曖昧さを持つ隅角部となっている。

石垣勾配は、全国的な傾向として野面積みは不定型な石材を使っていることから、緩やかな勾配となるが、甲府城跡でも概ね一致する傾向にある。

また、地形や石垣規模に規制されているようであるが、石垣勾配に緩急勾配等いくつかのバリエーションがあり、多様な造形美を表現している。

反りは、付け方によって次の3種類に分けられる。

①直線勾配

②ある一定の高さまで直線勾配だが徐々に反りが強まる勾配（金沢型）

③一定間隔で反りが変化する勾配（熊本型）

甲府城跡ではこれらの現象が、野面積み石垣全般にみられることから、やはり地形や構造、規模によって使い分けながら共存しているようである。

このような石垣の隅角部や勾配の特徴を持つ城郭は、甲府城跡に限らず江戸徳川氏を囲い込むように同時期に築城された松本城や会津若松城等にも共通して観察することができる。

よって3種類の石垣の勾配の共存は、隅角部に見られる不規則で曖昧な算木積みと共に、甲府城跡の石垣構築技術が未熟であったのではなく、技術的な変化期であったと裏付けられる遺構ではないかと考え検証を進めている。

その他、城内の要所には鏡石と呼ばれる巨石が配されている。一般的には景観的な配慮の他に技術力や経済力を誇示する意味があると言われるが、甲府城内の主動線に多く見られるなどの傾向も観察できる。

五奉行の時代の技術は面白い（まとめ）

甲府城は江戸の家康を牽制する目的で築城されたが、同様な目的で築城された城郭が関東を取り巻くように存在する。

長野県の松本城、小諸城、上田城、群馬県の沼田城、栃木県の唐沢山城、福島県の会津若松城等が上げられる。

これらは、江戸を囲むよう衛星的に築城（改修を含む）された兄弟のような城郭である。出土品を見ても、金箔瓦も出土しているし、石垣についても甲府城跡の野面積みと大変よく似た構造、例えば隅角部で石材は横長に使用すれば安定するのに、意図的に縦使いの石材を配石するという曖昧な算木積みを導入するというような技術的共通性を持っている。

甲府城以降に築城された城郭と比較したときに、五奉行の時代の築城技術は魅力的で面白い。石垣技術一つを見ても、曖昧さをもちながら堅牢に積み上げる石積み技術。文禄から慶長年間の石垣、装飾性豊かな瓦から想像できる煌びやかな建物群。

五奉行筆頭と言われる浅野氏の城郭は、その特徴を今も良好に残している。



図1 位置図



図2 甲府城築城期の情勢

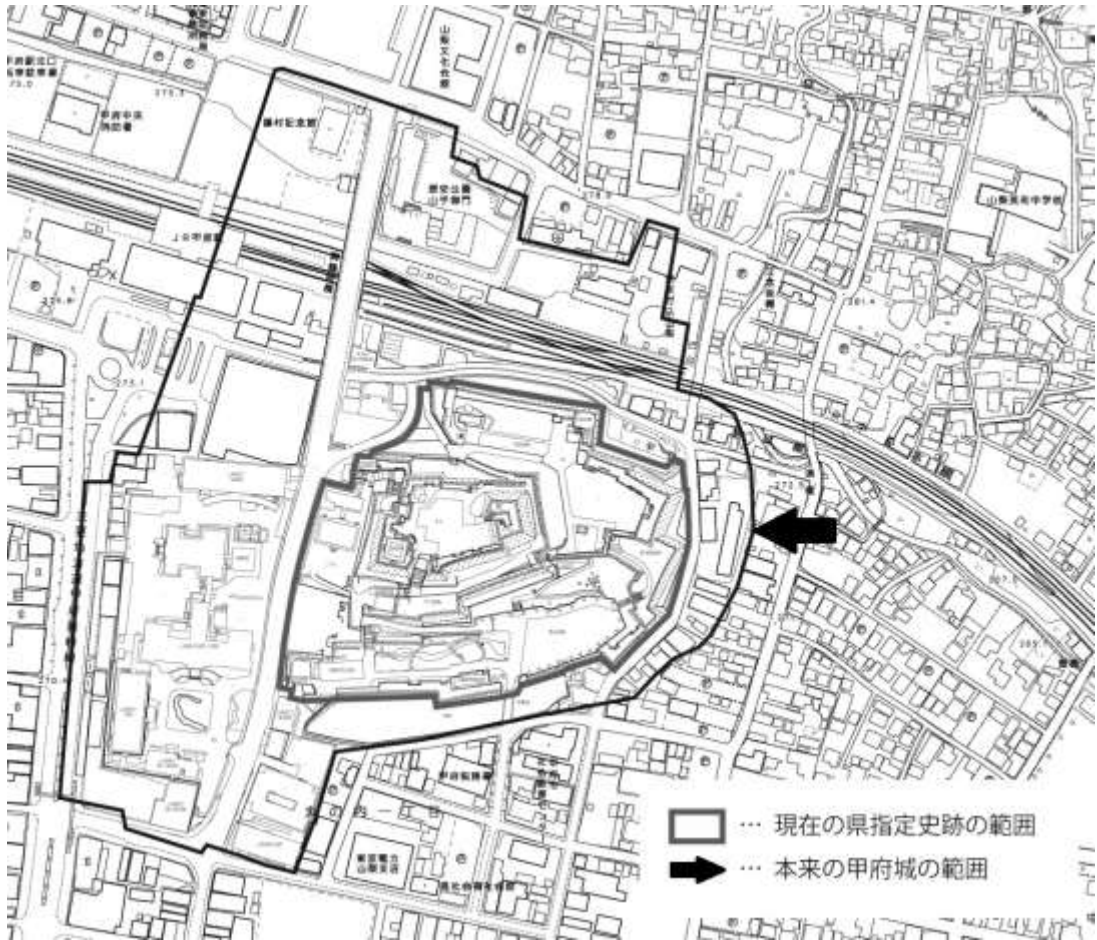


図3 甲府城平面図

時代区分	甲斐国主・藩主・甲府城代等		時代(開始年)	備考
織豊期	織田信長	甲斐：河尻秀隆	天正10年(1582)	穴山梅雪の本領(河内領)を除く。
	徳川家康	甲斐：平岩親吉	天正10年(1582)	穴山勝千代の本領(河内領)を除く。
	羽柴秀勝	—	天正18年(1590)	都留郡に三輪近家を配備。
	加藤光泰	—	天正19年(1591)	都留郡に加藤光吉を配備。石高21万石(推定)
	浅野長政	—	文禄2年(1593)	都留郡に浅野氏重(良重)を配備し、勝山城を築城(2万石)。石高21万石(長政5万石、幸長16万石)。後に太閤検地の結果により、22万5000石となる。なお長政は豊臣秀吉の奉行として上方に在駐していたため、幸長が甲斐国主として入国。
	浅野幸長	—		
江戸時代	徳川家康	城代：平岩親吉	慶長5年(1600)	都留郡に鳥居元忠を配備。
	藩主：徳川義直	城代：平岩親吉	慶長8年(1603)	25万石。都留郡に鳥居成次を配備。
	幕府直轄	城番：武川十二騎	慶長12年(1607)	第一次甲府城番制。都留郡は鳥居成次。
	藩主：徳川忠長	城番：武川十二騎	元和2年(1616)	元和4年説もあり。石高50万石(うち甲斐は18万石)。都留郡の鳥居成次が忠長家老となる(寛永9年に改易)。
	幕府直轄	城番：伊丹康勝	寛永9年(1632)	徳美藩主。都留郡には秋元泰朝が配備される(寛永10年、1万8000石で入封)。
			城番：幕府旗本	寛永13年(1636)
	藩主：徳川綱重	城代：渡辺綱治、戸田周防守ら	寛文1年(1661)	25万石(甲斐は14万5000石余)。都留郡は秋元氏(宝永1年武蔵国川越に転封)。
	藩主：徳川綱豊	—	延宝7年(1679)	—
	藩主：柳沢吉保	—	宝永1年(1704)	22万8765石余(甲斐三郡15万1288石余、内高7万7477石余)
	藩主：柳沢吉里	—	宝永7年(1710)	
	幕府直轄	甲府勤番支配	—	享保9年(1724)
甲府城代		—	慶応2年(1866)	駿府城代と同格。役金2000両。

図4 甲斐(甲府城)支配者一覧

(1) 加藤光泰書状

文禄二年(一五九三)一月カ

(上書)(切封)

かうらいより 遠江守
平兵衛殿
作 内殿

(略)

其国ふしん土手ひかしの丸石かき出来候や、此表之事、上様御存分ニ申付候て帰国仕、城をやかて見可申候 【東大史料編纂所影写本「大洲加藤文書」】

(2) 加藤光泰遺言状

文禄二年(一五九三)八月二十

八日

浅弾正殿 加藤遠江守

我等事、如御存、此中相煩ニ付而、種々養生仕候へども、終ニ不得験相はて申候、然者
甲斐国之義、かなめ之所、其上御国はし、作 十郎若輩之義候間被召上 御近所ニ被召遣候様ニ被
仰上可被下候、何様共せかれ之事頼入申候、誠御国被下御用ニも立不申、かやうニ相はて申事無念
ニ存候、併是事と存、不及是非候、随而上様江何ニても珍敷御道具上申度候へ共、如御存、我等すり
きり故、さ様之道具も無之条、金子五十まい上候て可被下候、此ちより甘まい進之候、相残分ハ国本
へ申遣候、何様共可然様ニ頼申候、巨細之義一柳右近かたへ申渡候、恐々謹言

【東大史料編纂所影写本「大洲加藤文書」】

図5 甲府城築城期関連資料

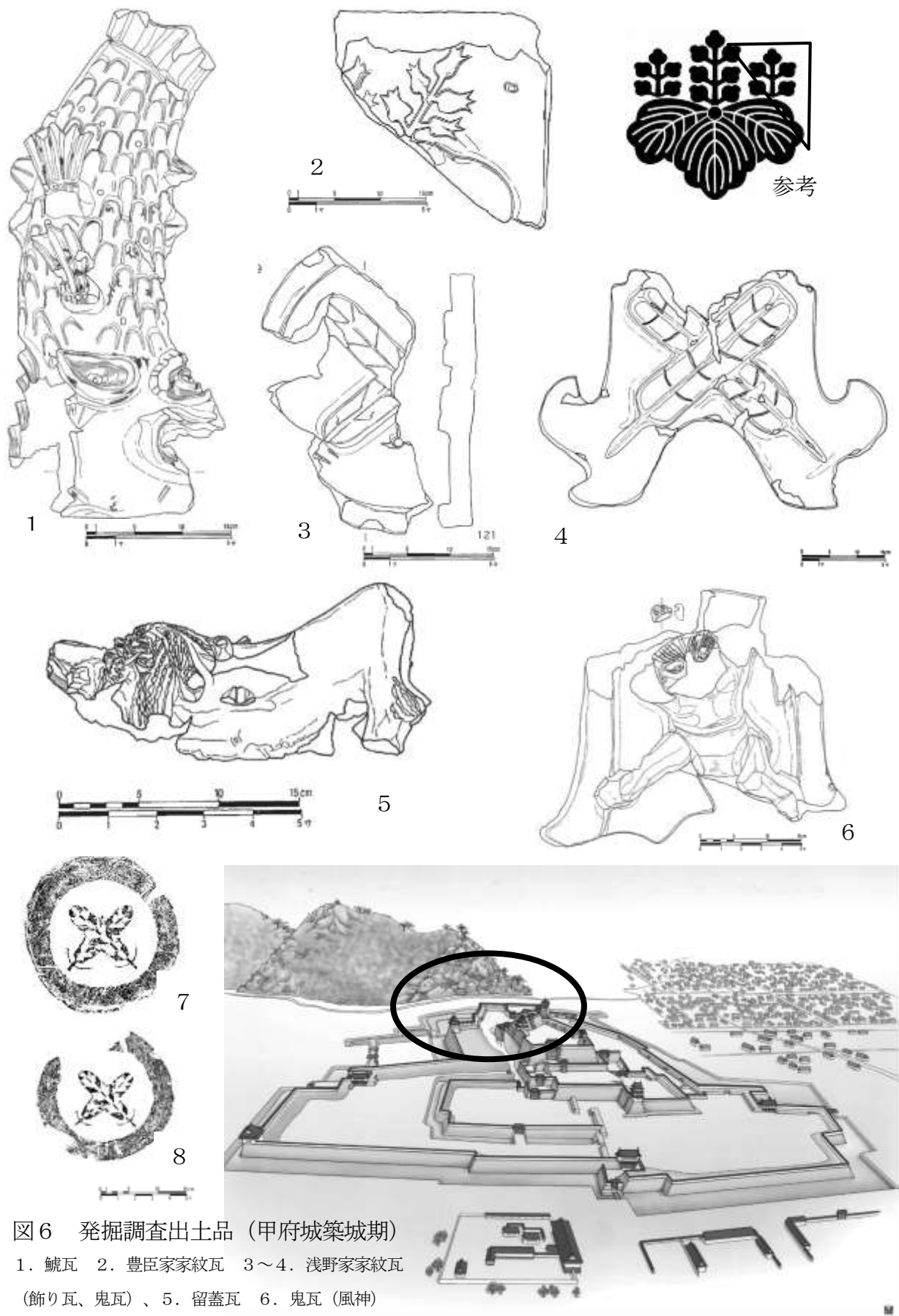


図6 発掘調査出土品（甲府城築城期）

1. 鯪瓦 2. 豊臣家家紋瓦 3～4. 浅野家家紋瓦
 (飾り瓦、鬼瓦)、5. 留蓋瓦 6. 鬼瓦 (風神)
 7～8 浅野家家紋瓦 (軒丸瓦)



図 1 3 天守台南東隅の石垣 (築城期)

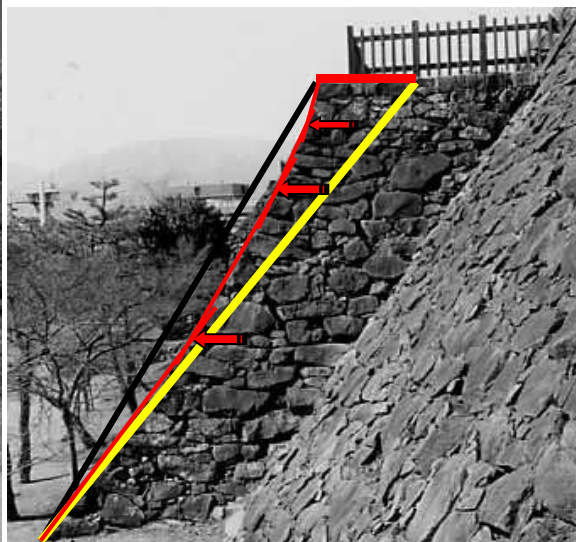


図 1 4 本丸南面の石垣勾配



図 1 5 良好に残る天守台南面石



図 1 6 延長 1 1 0 m の稲荷曲輪北面



図 1 7 高さ約 2 0 m の稲荷曲輪東面石



図 1 8 数寄屋櫓台の石垣



図19 発掘調査と歴史史料による甲府城築城技術

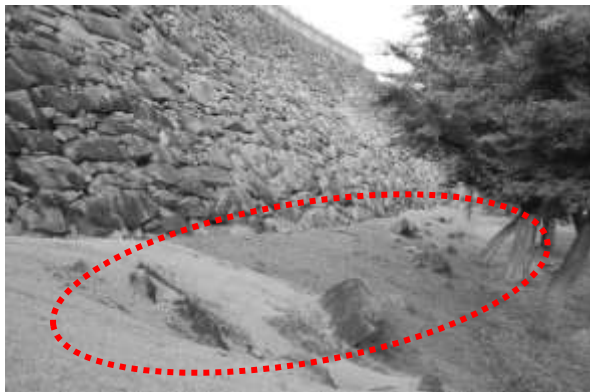


図20 本丸南面の構築技術



図21 本丸の石切場(埋設保存)

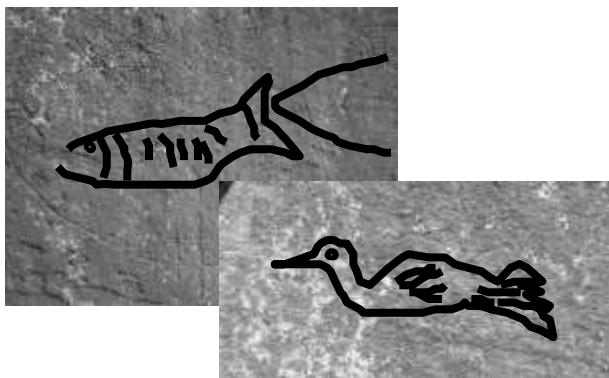


図22 城内石垣の線刻画



図23 本丸鉄門遺構平面図

前田玄以の城 丹波亀山城

京都府教育庁指導部文化財保護課

中居 和志

1. 亀山城の地名と立地

- ・ 亀山の地名：天正 5 (1577) 年の明智光秀書状が最古
- ・ 亀山と亀岡：伊勢亀山と混同を避けるため、明治 2 (1869) 年に変更
- ・ 亀岡盆地の中央を流れる桂川南岸、河岸段丘上に城の中心部を設ける。
- ・ 中心部の南側に城下町が展開し山陰道が東西に通過する。

2. 亀山城の歴史

①築城期（天正 5～10 (1577～1582) 年）

- ・ 近藤秀政の荒塚山の居館があったとの伝承
- ・ 明智光秀が天正年間の丹波侵攻の拠点として整備
- ・ 近世軍記物には、光秀が近隣の寺院などから用材を集めたと記載
→築城を急いでいたことを示す。

②豊臣期（天正 10～慶長 7 (1582～1602) 年）

- ・ 羽柴秀勝や羽柴秀俊など自身の養子や甥を城主とする。
→秀吉が近親者を配する亀山城の重要性
- ・ 二の丸や三の丸の整備、天守の改築など整備は続く。

③天下普請期（慶長 7～元和 7 (1602～1621) 年）

- ・ 因幡鳥取城主池田長吉などの西国大名が動員される。
→徳川氏による豊臣包囲網の一環
- ・ 伊予今治城主藤堂高虎が今治城の天守を移築
- ・ 矢穴や刻印の入った石材は大多数がこの時期
- ・ 幕末まで続く亀山城の完成

④廃城後（明治 7 (1874) 年～）

- ・ 京都府による調査の後、建物から土地に至るまで民間に払い下げる。
- ・ 石垣石材の多くは京都鉄道の建設用材となる。
- ・ 大正 8 (1919) 年に宗教法人大本が城跡を買い取り綾部と並ぶ本部とする。
- ・ 昭和 10 (1935) 年第二次大本事件により徹底的な破壊を受ける。
- ・ 戦後、宗教法人大本によって城跡が整備される。

3. 亀山城の縄張りと構造

○中心部

- ・独立丘陵頂部に本丸を配する。
- ・北側は桂川の段丘崖にあたり、比高差約 30m
- ・本丸は天守と本丸御殿の立つ上段と多聞櫓を巡らす下段に分かれる。
- ・上段石垣の基底部には明治以前の石垣が残存する。
- ・本丸の西側に西の丸、堀を挟んだ南側に二の丸を配する。
→絵図の表記によっては二の丸の場所が異なる。
- ・城下町の広がる南側は段丘上にあたり、中心部との比高差は約 15m
- ・比高差の低い南側に外堀、惣構を設ける。
- ・外堀には北側に保津門、東側に雷門、南側に古世門・大手門、西側に西門を設ける。
- ・大手門の内側に「御館」と呼称される藩主屋敷を設ける。

○惣構・城下町その他

- ・惣構は北条氏勝が城代の慶長 6～7 (1601～02) 年頃に完成する。
- ・惣構の残存部分の一部が亀岡市指定史跡に指定されている。
- ・城下町内には、一部田が存在していた(「岡部長盛判物」)
- ・石切丁場は、約 4 km 離れた行者山周辺に存在
- ・石切丁場には「あさのきい」の刻印もあり、浅野幸長が関わっていたか。

4. 前田玄以と亀山城の関わり

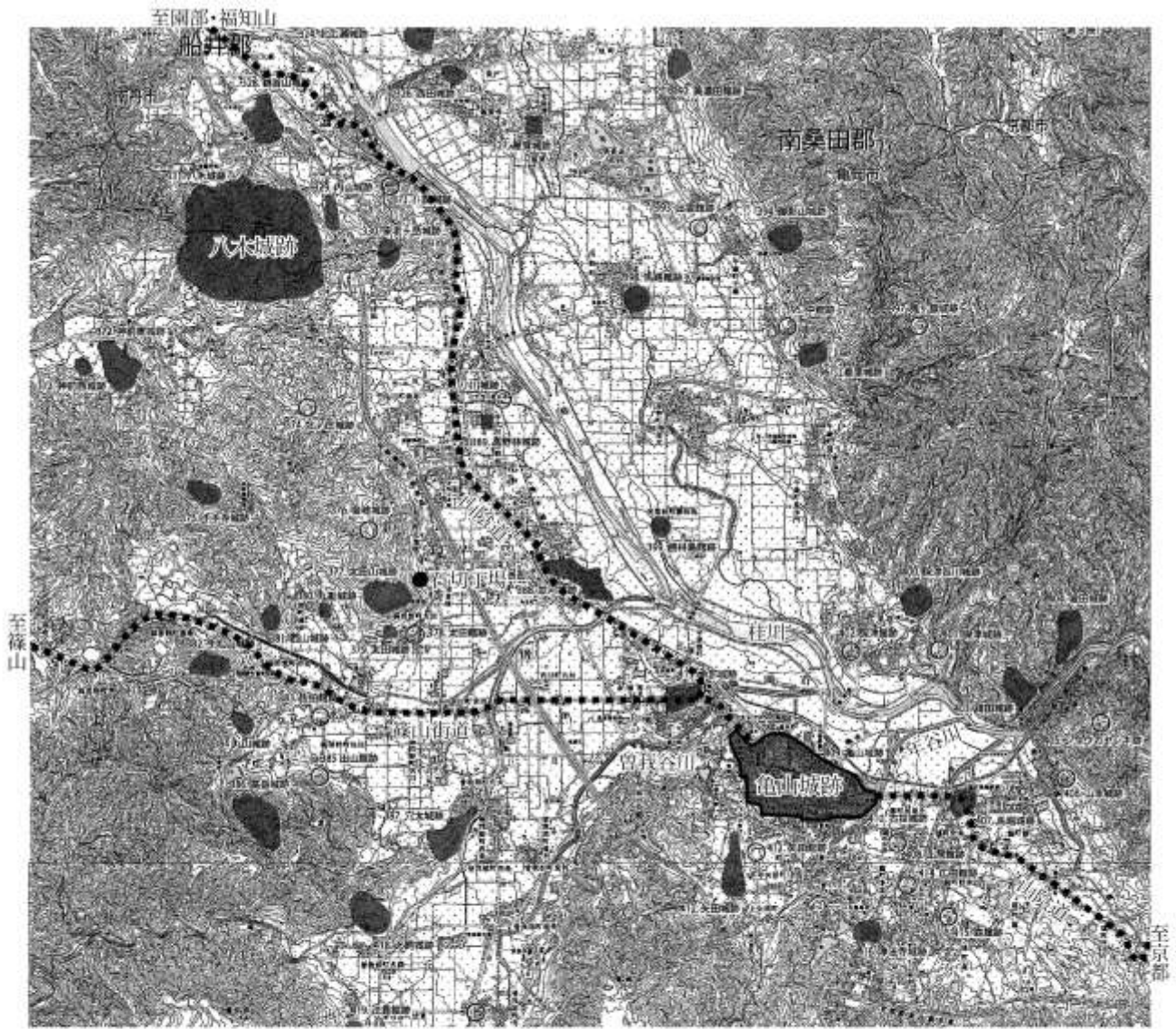
- ・前田玄以が亀山城について残した文献はなし。
→文禄 4 (1595) 年 10 月付けで長男、前田秀以が城下の鍬山神社に禁制
→玄以が長男を名代として置いていた証し
- ・前田玄以は伏見在城が多かったか？

<参考>伏見城における前田玄以の屋敷地 (第 8 図参照)

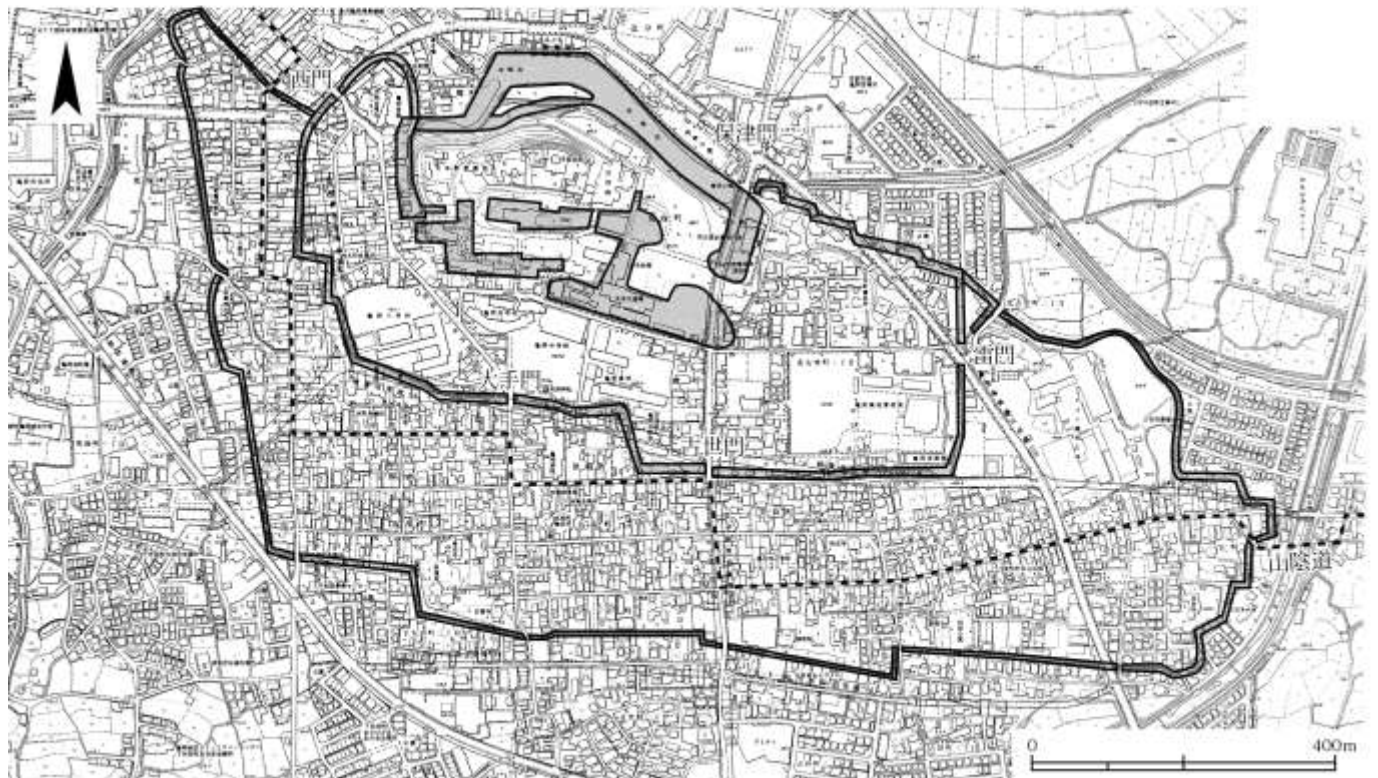
- ・「伏見古城図」等の絵図には五奉行石田三成、長束正家、増田長盛は記載
→石田三成：郭 6、長束正家：郭 7、増田長盛：郭 11
- ・前田玄以、浅野長政の屋敷地は記載がない。
→姜沆『看羊録』には、「外城」の北側に「徳善院」(前田玄以)の屋敷あり、との記載
→郭 7・8 のどこかにあった可能性

【主な参考文献】

- ・亀岡市 2000 『新修亀岡市史』資料編第 1 巻
- ・亀岡市文化資料館 2010 『第 26 回特別展 光秀・亀山城・城下町』
- ・京都府教育委員会 2013 『京都府中世城館跡調査報告書第 2 冊—丹波編—』



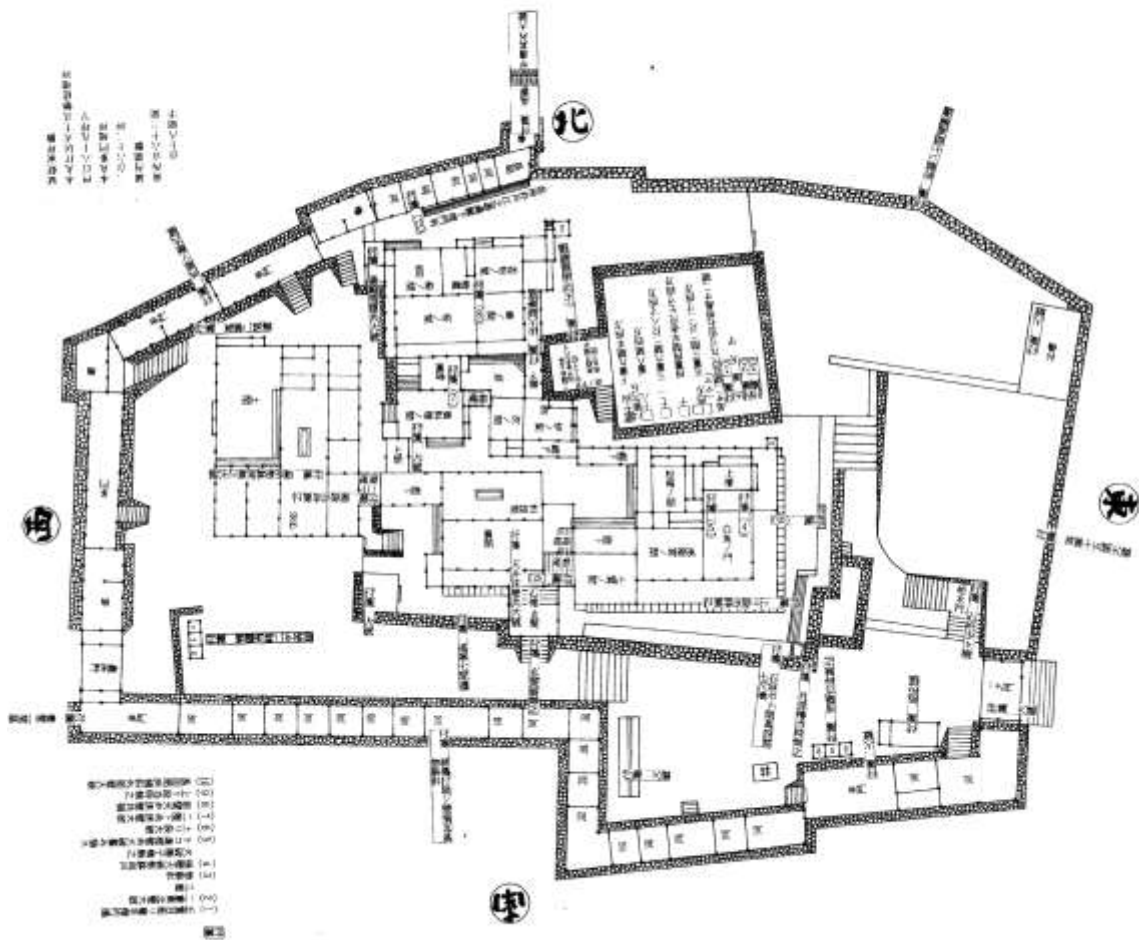
第1図 亀山城跡と周辺の城館等位置図(S=1/7万 『京都府中世城館跡調査別冊』より改変)



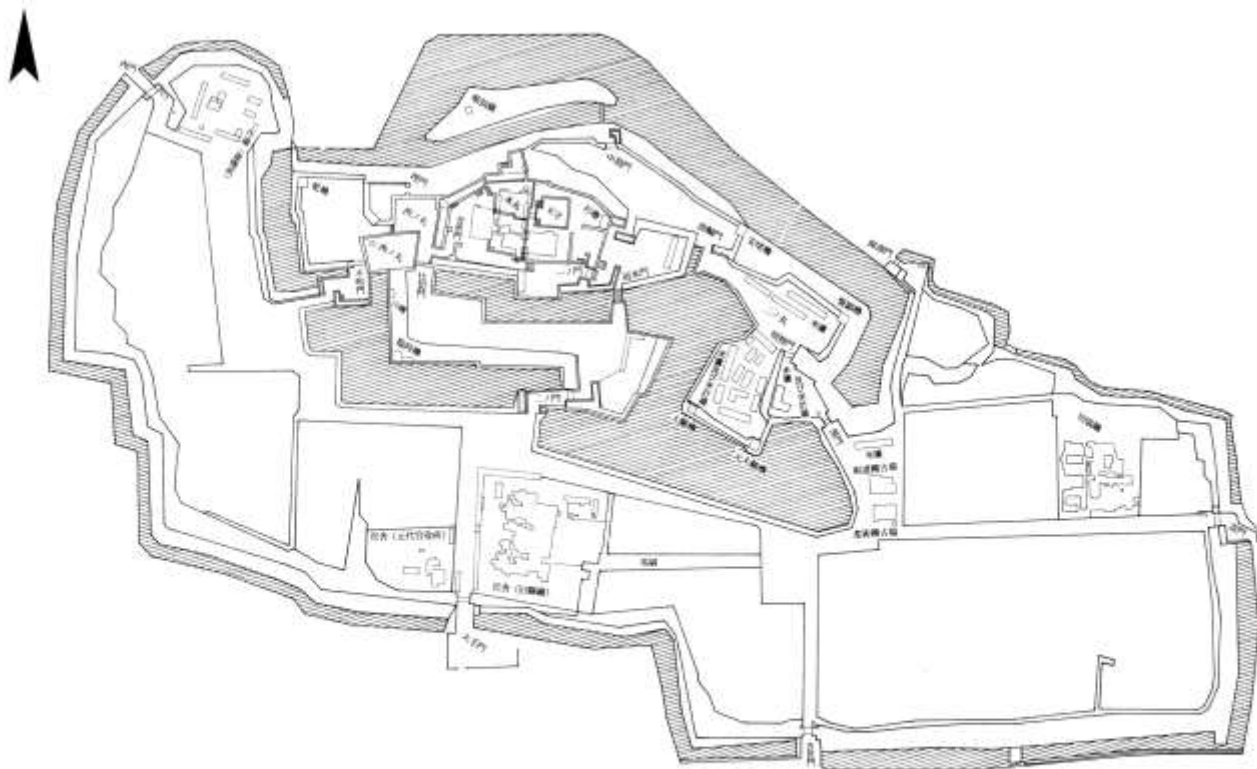
第2図 亀山城跡全体図(S=1/1万)



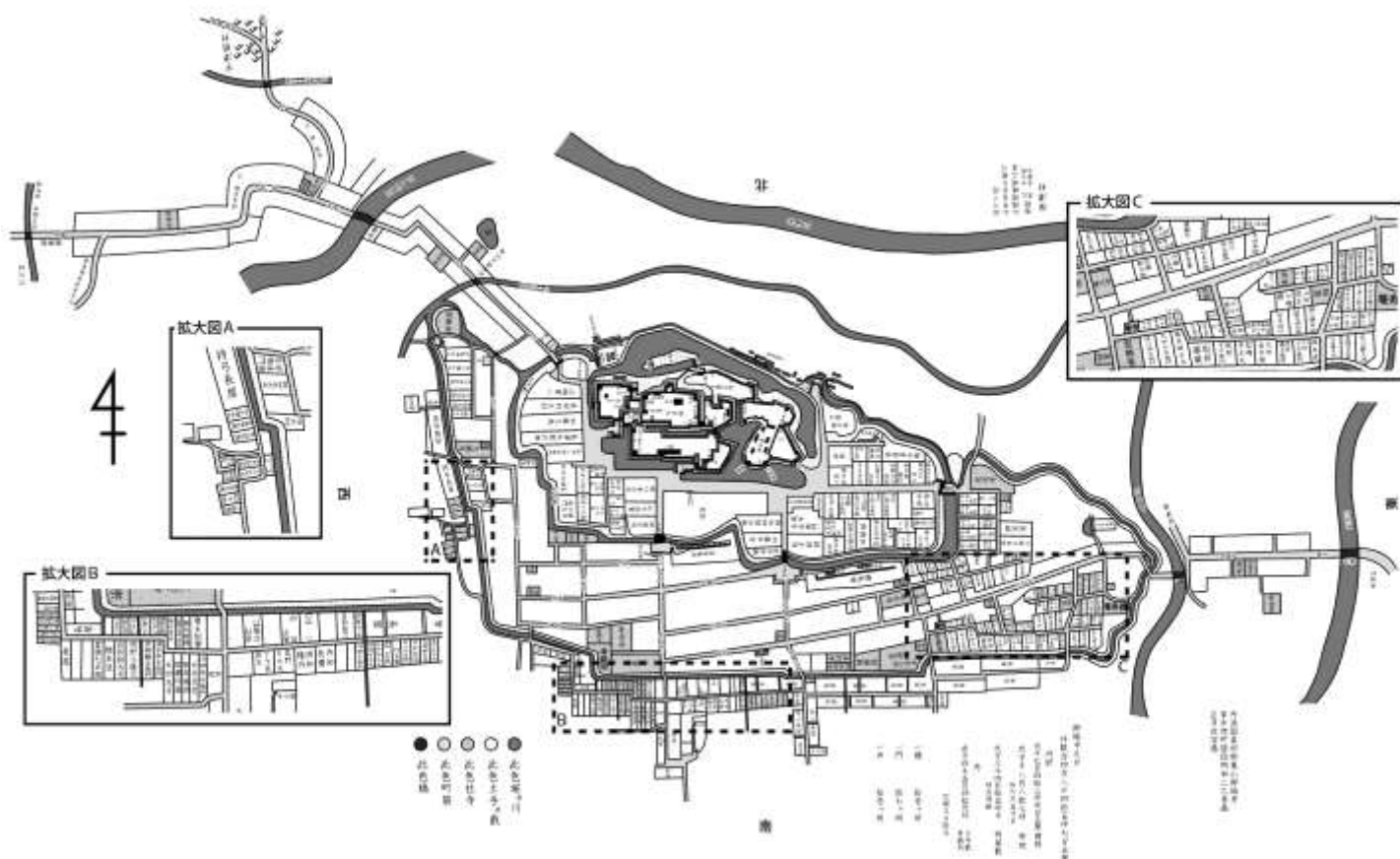
第3図 亀山城古写真(美田村顕教撮影 『京都府中世城館跡調査第2冊』より)



第4図 亀山城絵図(トレース図 『京都府中世城館跡調査第2冊』より)



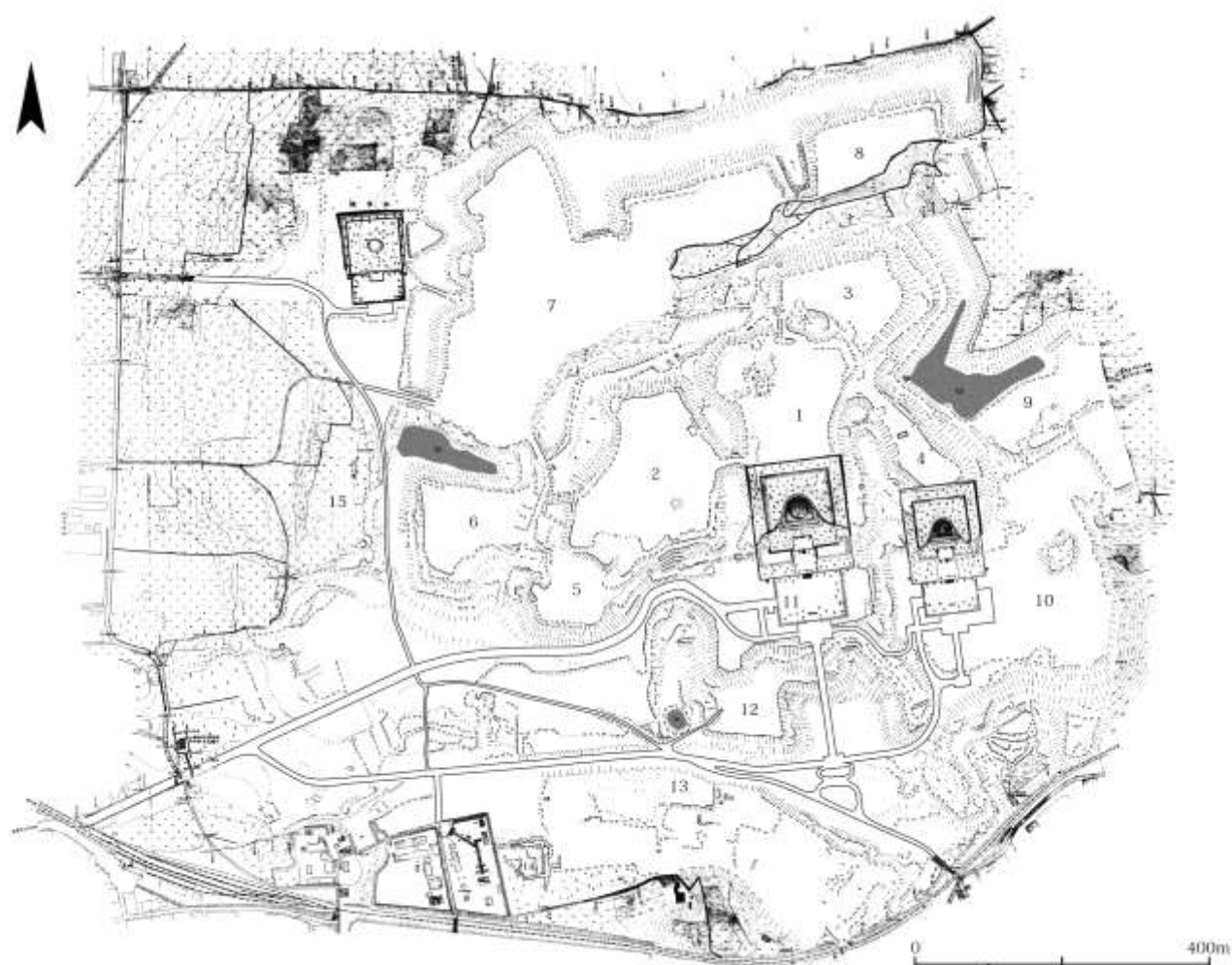
第5図 丹波国桑田郡亀岡城郭分間絵図(トレース図『京都府中世城館跡調査第2冊』より)



第6図 亀山御城并家中惣町筋図トレース図(トレース図『京都府中世城館跡調査第2冊』より)

人名	在城期間	城郭整備	備考
明智光秀（城主）	天正3・4年～天正10年 (1575・76) (1582)	龜山普請・龜山惣堀普請	
堀尾吉晴（代官）	天正10年（1582）		本能寺の変後、龜山城を没収する
羽柴秀勝（城主）	天正10年～13年 (1582) (1585)		信長の四男、秀吉の養子
羽柴秀勝（城主）	天正13年～17年頃 (1585) (1589)		三好吉房次男、秀吉の甥、秀吉の養子
羽柴秀俊（城主）	天正19年～文禄4年 (1591) (1595)	本丸・二の丸・三の丸が整備される。 また、天守が三重から五重に改められた という	秀吉の養子、後の小早川秀秋
前田玄以（城主）	文禄4年～慶長7年 (1595) (1602)		
前田茂勝（城主）	慶長7年（1602）		
北条氏勝（代官）	慶長6年～慶長7年頃 (1601) (1602)	惣堀が完成する	龜山城の在番を勤める
権田小三郎（代官）	慶長7年～慶長16年 (1602) (1611)	城内の内堀が完成する	丹波国代官
四部長盛（藩主）	慶長14年～元和7年 (1609) (1621)	天下普請により層塔型の五重の天守が完成 する 大手門・外堀なども完成	初代龜山藩主

第7図 龜山城の築城過程(亀岡市文化資料館図録『光秀・龜山城・城下町』より)



第8図 伏見城跡中心部縄張図(S=1/1万 『京都府中世城館跡調査第3冊』より一部改変)

増田長盛・長東正家の城 水口岡山城

甲賀市教育委員会事務局
歴史文化財課 小谷徳彦

1. 水口岡山城の概要（年表は表1）

- ①築城年代 天正13年(1585年)
- ②築城目的 甲賀郡の直接支配と東国への牽制
- ③立地 水口平野の喉元 独立丘陵「古城山」 ⇒ 360°の眺望
東海道・野洲川が山麓を通る ⇒ 東海道を中心に城下町
東に鈴鹿峠を望む ⇒ 東国を見据えた拠点
- ④歴代城主
 - 中村一氏 在城期間：天正13年～天正18年
岸和田城から移封 水口6万石を拝領
天正18年(1590年)、駿河国駿府城へ移封
豊臣秀次（秀吉の甥）の付家老のひとり 後に豊臣政権の三中老のひとり
 - 増田長盛 在城期間：天正18年～文禄4年
豊臣政権の五奉行のひとり
文禄4年(1595年)、大和郡山城へ移封
 - 長東正家 在城期間：文禄4年～慶長5年
豊臣政権の五奉行のひとり
慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いで西軍に
戦いの後、水口まで敗走するも城を明け渡して自刃（追手方：池田長吉）
- ⑤関ヶ原の戦い後
 - 一時期、池田長吉の預かりに 預かり期間は不明
 - 用材転用 古御殿跡 試掘調査で同範瓦出土 遺構は不明
築城年代 慶長8年説と元和6年(1621年)説
 - 水口城跡 石垣に2種類の矢穴痕 石材転用の可能性
築城年代 寛永11年(1634年)
 - ⇒ 遅くとも寛永11年までには廃城（破城）となったと推定できる
 - 天和2年(1682年) 水口藩成立 以後、水口岡山城跡は御用林となる

2. 増田長盛と水口岡山城

- (1) 城主着任：天正18年(1590) 上甲賀3万石を拝領 のちに5万石
「豊臣秀吉朱印状」天正18年10月25日（【史料1】）
上甲賀の中村領を増田長盛に引き継ぐ

「ちきやう出候おほへの事」天正 19 年頃カ (【史料 2】)

甲賀の城付地 3 万石＝水口岡山城に付属する所領

「増田長盛寄附状」天正 18 年 12 月 19 日 (【史料 3】)

河合寺に「屋敷分地子米」8.39 石を寄進

「増田長盛寄進状」天正 20 年 2 月 19 日 (【史料 4】)

浄慶寺に対して「東北町屋地子米」を寄進

(2) 水口岡山城と増田長盛

①秀吉の天下統一による城の性格の変容

対東国の拠点 → 地域経営の拠点 = 官吏派の城主

②城郭遺構への反映は？

発掘調査では増田段階の明確な改修は確認できない

城下についても同様

③朝鮮出兵 (文禄の役)

文禄元年 (1592) 6 月 渡海 → 文禄 2 年 (1593) 5 月 帰国

④太閤検地

天正 19 年 (1591) 近江国検地 長束正家とともに

文禄 2 年 (1593) 越後国検地 石田三成・大谷吉継とともに

3. 長束正家と水口岡山城

(1) 城主着任：文禄 4 年 (1595) 5 万石か

「今度御知行御取候かたゝゝ事」文禄 4 年 (1595) 7 月 20 日 (【史料 5】)

増田長盛の所領を長束正家が引き継ぐ

「奥村宗才書状」文禄 4 年 (1595) 10 月 10 日 (【史料 6】)

油日神社に対して年貢を免除

「長束正家書状」文禄 5～慶長 5 年 (1596～1600) 6 月 14 日 (【史料 7】)

大溝城から水口へ部材を運ばせた

(2) 水口岡山城の改修

①大溝城からの部材転用 【史料 7】

同範瓦の出土 東櫓台 (推定天守台) で集中的に出土

軒丸瓦 全体数 109 個 うち、大溝城の瓦 31 個 28.4%

軒平瓦 全体数 61 個 うち、大溝城の瓦 20 個 32.8%

②東櫓台の構造と出土瓦

入隅の L 字状の石垣 北東側に張り出す構造 四角形ではない

垂直に積まれた 2 石垣 推定高さ 1 m

石垣面揃う

主郭部の東端に位置 北・西・南の三方向は主郭部の石垣墨線と一致か？
建物に使われた軒瓦はおよそ 2 種類
大溝城から運ばれた瓦＋水口岡山城で生産された瓦（産地は不明）

4. まとめ

大溝城からの部材の搬入 ⇒ 運ばれた瓦の存在が証明 全体の 3 割弱
出土位置は東櫓台周辺に集中
東櫓台の構造 ⇒ 張り出し部をもつ形状 主郭側の高低差は低い
東櫓の瓦 ⇒ 大溝城の瓦＋水口岡山城の瓦 違いは歴然
揚羽蝶文鬼瓦の存在 意味づけは今後の課題

表 1 水口岡山城関係年表

年 代	水口岡山城・城主・水口	政治的動向	城郭の築城・改修
古代	白鳳14(674or685)6/18 古城山上に大岡寺が開かれ、盛時は6～16坊を数えるという 天仁2(1109)2/25 朝廷の追捕を受けた源義綱、大岡寺で出家		
中世	承応2(1223)4/4 「海道記」の筆者、甲賀の「大岳」の「柴ノ宿」に宿泊。応永10(1403)10/ 室町幕府將軍足利義満、水口を通過。同21(1414)12/ 同足利義持、水口に宿泊。永享5(1433)3/ 同足利義教、水口に宿泊。大永7(1527)3/4 連歌師宗長、水口の町並と私関の様子を日記に記す		
天正11 1583			9/ 大坂城築城開始
天正12 1584		4/ 小牧長久手の戦い始まる 11/ 羽柴秀吉と織田信雄和睦	
天正13 1585	5/ 中村一氏、水口入封（6万石）。水口岡山城築城開始。山上の大岡寺を山下に移す。矢川寺の堂塔を毀ち築城に利用 7/ 中村一氏、式部少輔任官	3/ 紀伊平定 4/ 秀吉、甲賀衆を改易 6/ 四国平定 7/ 秀吉、従一位・関白任官 閏8/18 秀吉、羽柴家勢力圏内の大規模国替え実施	閏8/22 羽柴秀次、近江43万石拝領。うち23万石を「宿老共」に宛がう。堀尾吉晴、佐和山入封。八幡山城築城開始 9/3 羽柴秀長、大和郡山入封 11/29 堀尾吉晴、佐和山城改修開始
天正14 1586		10/ 徳川家康、大坂城で秀吉に臣下の礼をとる 12/19 秀吉、太政大臣任官。以後「豊臣」に改姓か	2/ 聚楽第造営開始 大坂城二ノ丸普請開始
天正15 1587	この年 中村一氏、京都留守役	5/ 九州平定	
天正16 1588		4/14 後陽成天皇、聚楽第に行幸	この年 宇喜多秀家、備前岡山城築城開始
天正17 1589			3/ 毛利輝元、安芸広島城築城開始
天正18 1590	3/ 中村一氏、小田原攻めに際し北条氏の支城山中城を攻略 7/ 中村一氏、駿府府中へ移封（14万石）。増田長盛、水口入封（3万石、のち5万石）	7/ 関東平定 この年 奥州平定	7/ 秀次、尾張・北伊勢へ移封 京極高次、八幡山へ移封 堀尾吉晴、遠江浜松へ移封
天正19 1591	この年 増田長盛・長束正家、近江国の検地を実施	8/ 秀吉、「唐入り」宣告 12/18 秀吉、太閤を称する	4/ 石田三成、佐和山に入る 肥前名護屋城普請開始
文禄元 1592	6/3 増田長盛、石田三成・大谷吉継とともに朝鮮へ渡海	4/ 朝鮮出兵始まる	8/ 指月伏見城築城開始
文禄 2 1593	1/23 増田長盛、朝鮮より帰国し肥前名護屋の長束正家に情勢を報告	8/3 豊臣秀頼誕生	
文禄 3 1594			この年 指月伏見城改修開始
文禄 4 1595	6/8 増田長盛、大和郡山へ移封（20万石）。長束正家、水口入封（5万石のち12万石）、従四位下・侍従任官 この年以降 大溝城殿主を水口へ運び、本丸に東櫓を建てる	7/ 関白豊臣秀次失脚、高野山にて自害	8/ 石田三成、佐和山城主となる この年 八幡山城・大溝城廃城
慶長元 1596			閏7/ 伏見城完成するも大地震で倒壊。木幡山伏見城築城開始
慶長 2 1597		1/ 慶長の役。朝鮮への再出兵	この年 伏見城完成
慶長 3 1598		8/18 秀吉死去 10/8 朝鮮出兵終わる	
慶長 4 1599			
慶長 5 1600	6/18 長束正家、徳川家康暗殺を計画するも未遂に終わる 9/30 池田長吉・亀井茲矩が水口岡山城を囲んで開城させ、城を接収。美濃部茂盛ら、城の守衛にあたる	6/16 徳川家康、会津攻めのため大坂城を発つ 9/15 関ヶ原の戦い	7/ 伏見城落城 9/ 佐和山城落城
慶長 6 1601	1/ 水口宿成立		1/ 井伊直政、佐和山入封
慶長 7 1602	9/ 水口で慶長検地実施		
慶長 8 1603		2/ 家康、征夷大將軍任官	
慶長 9 1604			7/ 井伊直継、彦根城築城開始（完成後に佐和山城廃城）
元和 6 1620	この年 水口御茶屋（古御殿）が築かれたという	この年 徳川和子、後水尾天皇の中宮として入内	
寛永10 1633	5/ 將軍徳川家光、水口城（碧水城）築城を決定		
寛永11 1634	8/以前 水口城完成。家光、帰国時に休泊		

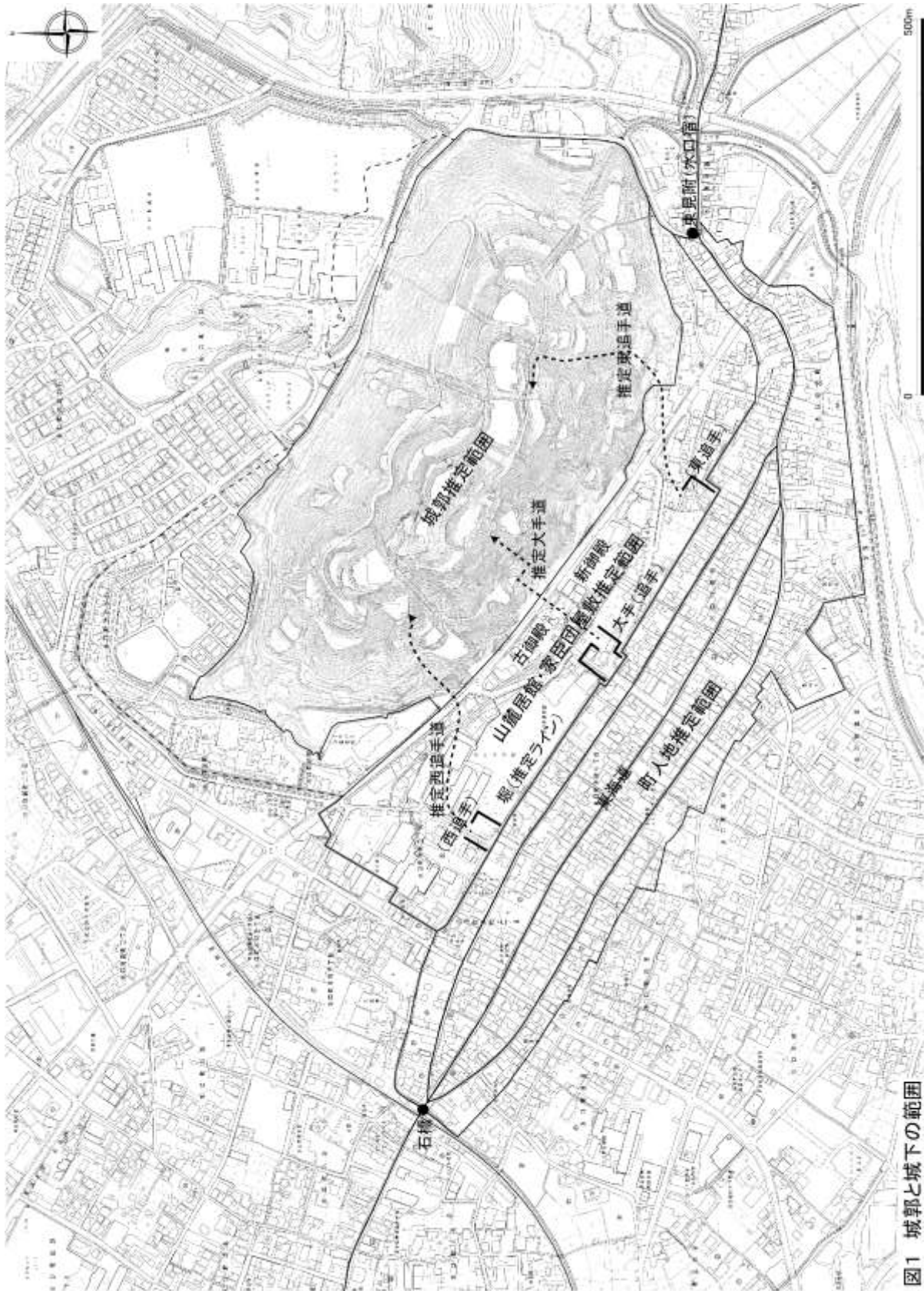


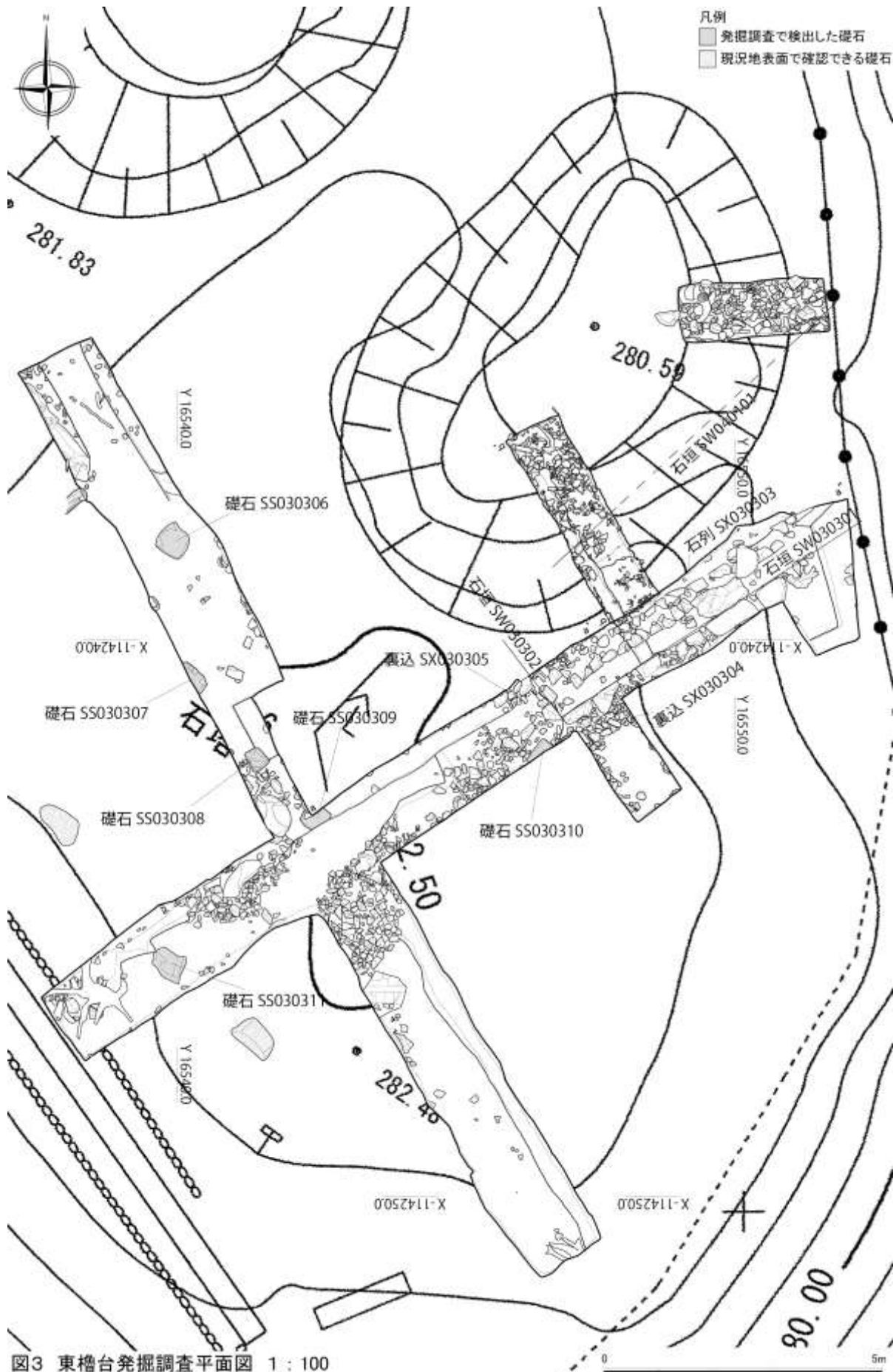
図1 城郭と城下の範囲

遺構記号の凡例

遺構名	記号
曲輪	数字
溝	a
堀	b
堀切・築堀	c
土塼・盛土塼	d
石垣	e



図2 城郭遺構概要図 1 : 4,000



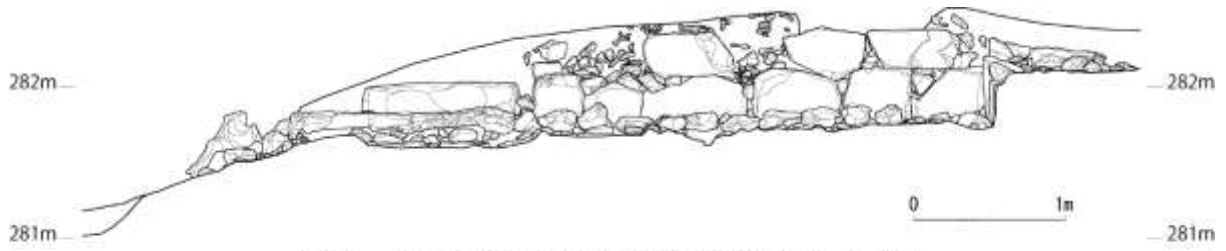


図4 東櫓台の石垣(上段)立面図① 1:50

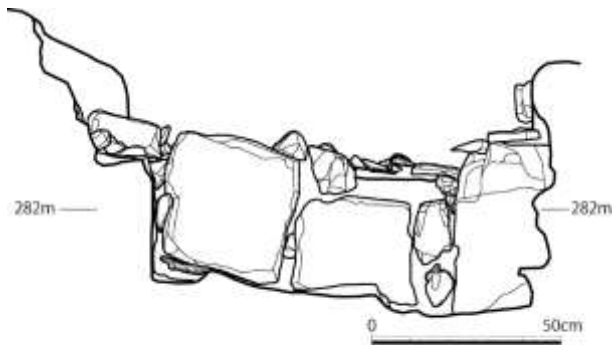


図5 東櫓台の石垣(上段)
立面図② 1:20

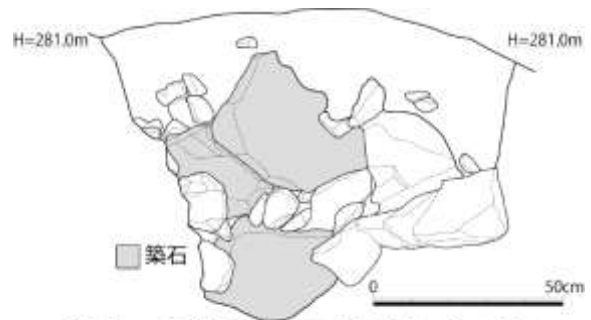


図6 下段の石垣立面図 1:20



写真1 東櫓台で発掘した石垣(石垣 SW030301・030302)

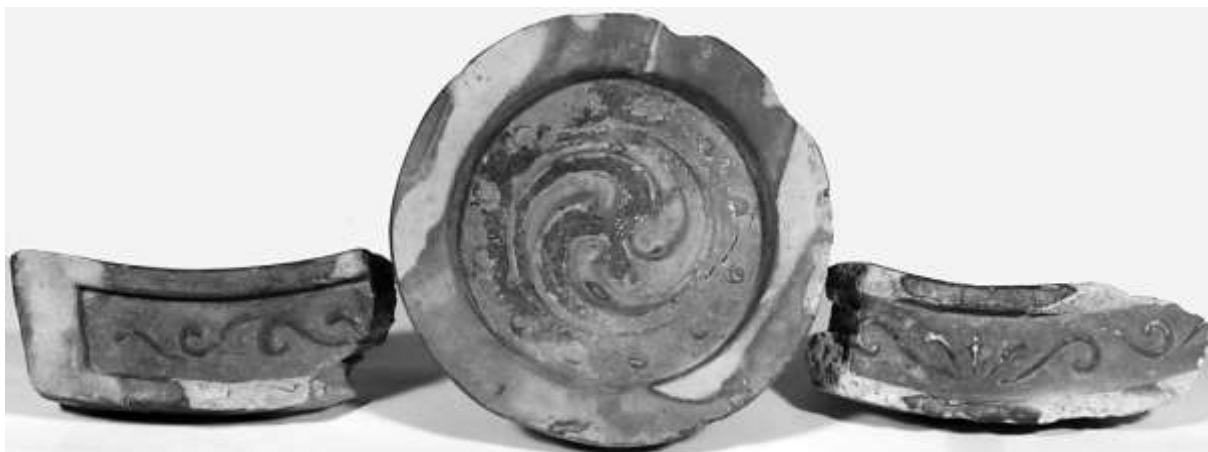


写真2 大溝城から運ばれた軒丸瓦・軒平瓦



写真3 長束正家の段階で生産された軒丸瓦・軒平瓦



写真4 寺院から転用された軒丸瓦・軒平瓦（中村一氏段階）

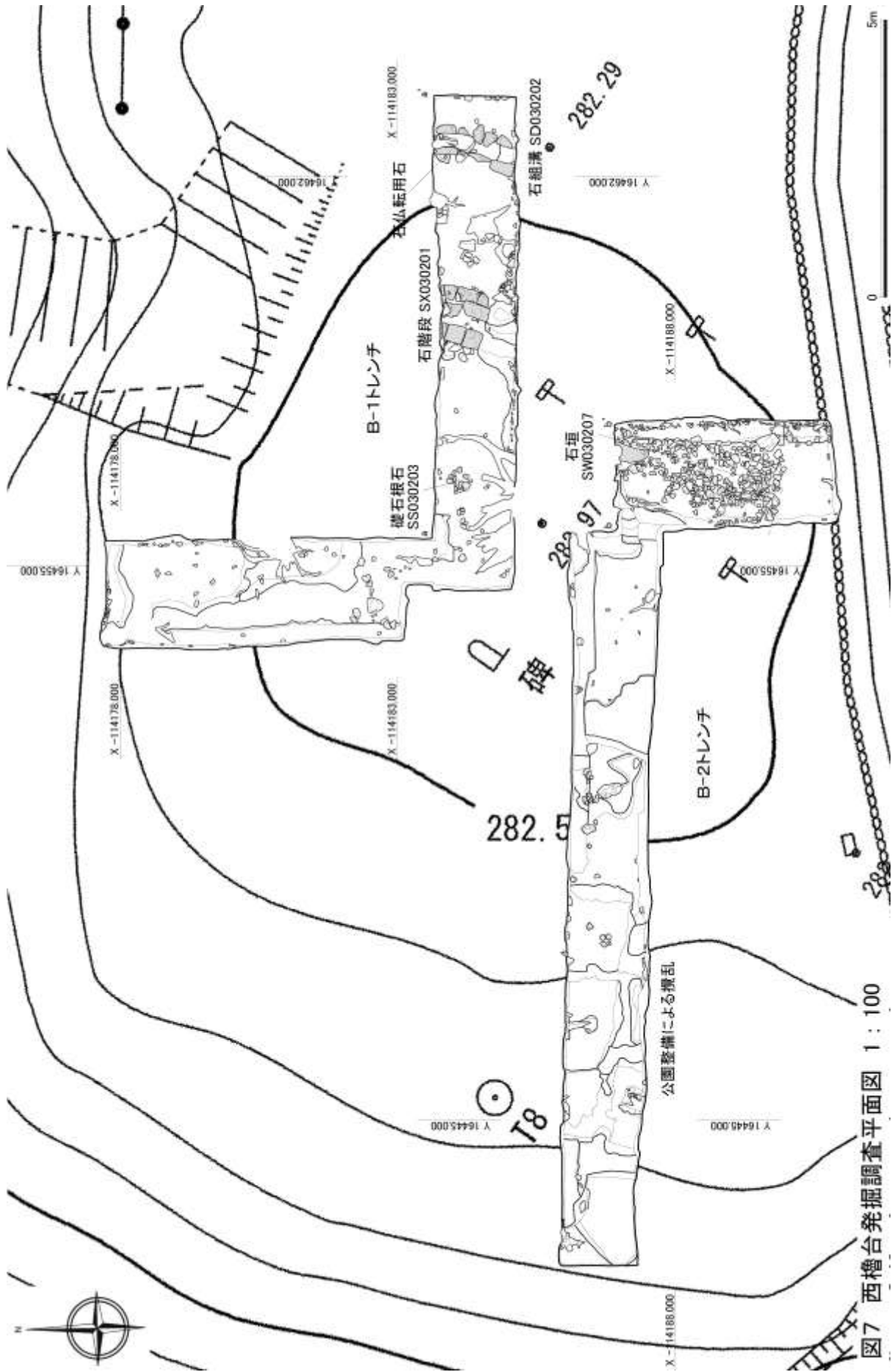




図8 検出遺構から見た檜台a-1の構造 1:200

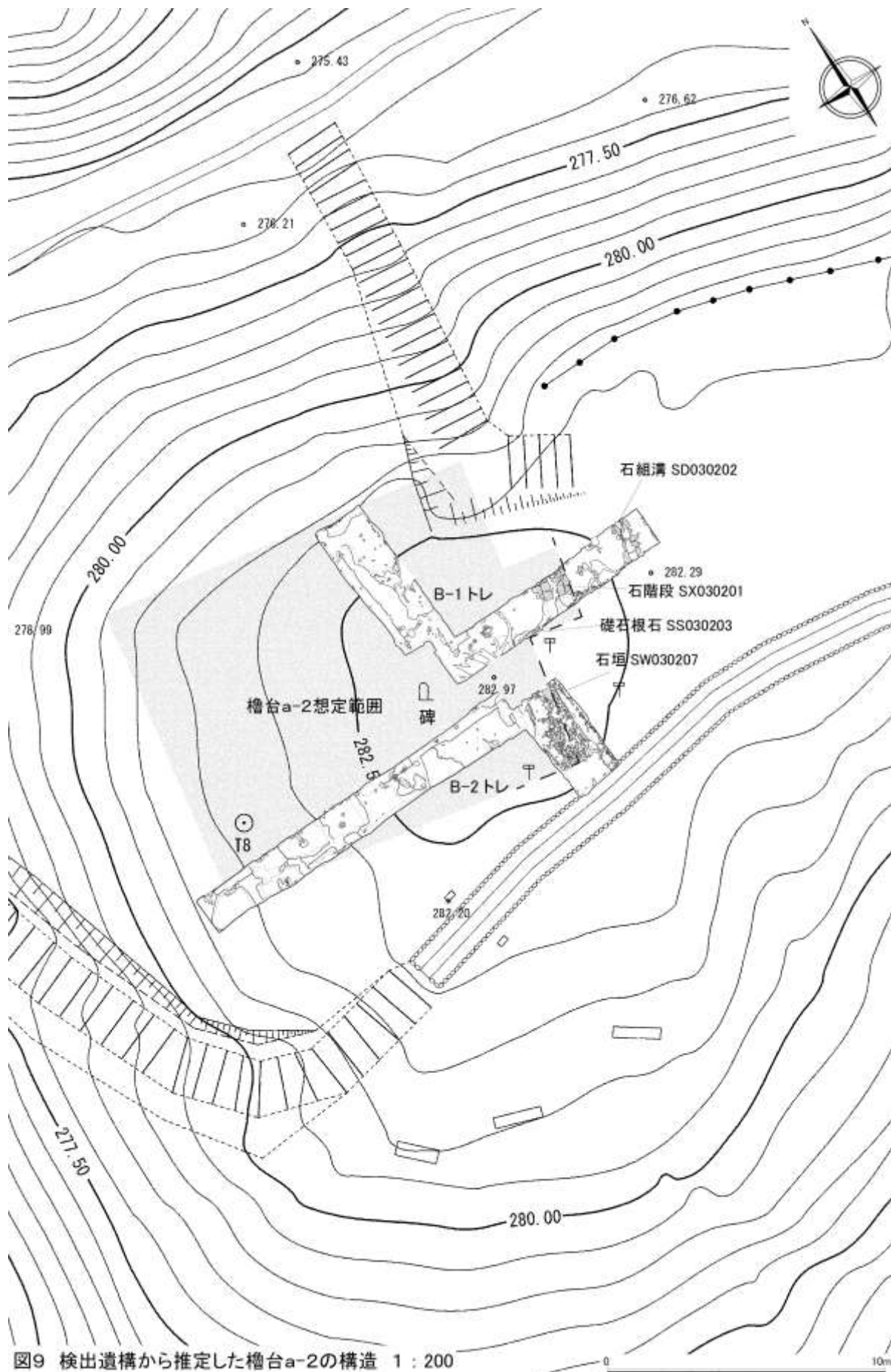


図9 検出遺構から推定した櫓台a-2の構造 1 : 200

【史料1】豊臣秀吉朱印状（市立長浜城歴史博物館所蔵）

（一氏）

（長盛）

上甲賀中村式部少輔当知行分儀者、増田右衛門尉ニ可引渡候、其外下
甲賀明所候ハ者、為西三人御代官可仕候也、

（豊臣秀吉）

十月廿五日（朱印）

田辺入道とのへ

（建部高光）

寿得

（直吉）

長束藤三とのへ

一、二まん石同小きう人

（以上）

い上十五まん石

廿四まん五千六百石

【史料3】増田長盛寄附状（大鳥神社蔵「大鳥神社古文書」）

一、当寺屋敷分地子米合せて八石三斗九升之儀令寄附候条全可有寺納
也、依而如件、

天正十八年十二月十九日

増田右衛門尉長盛（花押）

河合寺

【史料2】ちきやう出候おほへの事（「前川道平氏所蔵文書」）

（知行）

（寛）

ちきやう出候おほへの事

（家康）

一、拾まん石いゑやすへ

（佐和山）（城付）

一、四まん石さわ山しろつきの事

（甲賀）（城付）

一、三まん石こうかのしろつきの事

（八幡山）

一、老まん石八まん山の物

（八幡山）

一、二まん石同八まん山のもの

（八幡山）（蔵入）

一、三まん石同八まん山くら入候

（給人）

【史料4】増田長盛寄進状（大徳寺蔵「水口大徳寺文書」）

（奥貼紙）

「増田右衛門尉殿 境内」

地子米免許状

東北町屋地子米之事、浄慶寺江令寄進訖、全可有寺納状如件、

増田右衛門尉

長盛（花押）

天正廿

二月十九日

叡誓上人

【史料5】今度御知行御取候かた〜事（「佐竹家旧記」）

今度御知行御取候かた〜事

（中略）

（郡山）

一、十五万石大和氷山増田右衛門尉殿

（中略）

一、五万石

増田右衛門尉殿
近江ミナ口

長東大蔵殿

（中略）

（加増）

此外小身之御小姓衆、いつれも〜二百石・三百石つゝかさおん被下候者なり、

文祿四年七月廿日

【史料6】奥村宗才書状（「伴良松家文書」）

（正家）

今度油日大明神江長東大蔵大輔寄進分之事、合拾弍石九斗三升者右

三院御引得分を以可有寺納旨被申付候条、可有其御意得候、恐々謹言、

文祿四年

奥村左馬助

十月十日

宗才（花押）

油日大明神領

御寺僧中

【史料7】長東正家書状（「西川文書」）

書状披見候、

一、殿主悉こほち候て向地へ遣、大津への材木仕分候て一昨日各令同道罷渡由尤候、存知外はやく隙明候て令満足候、

一、用二立候材木水口へ遣、其外八大津へ相届由、尤候、

（江頭）

（間宮）

一、大材木多かしらへ相着候由尤候、与左衛門請取候由、得其意候、

一、小材木・かわら以下八舟木へ相着、兵介・二郎右衛門請取候由、是又尤候、

一、大溝にて召仕候大工数并人足之員数、別紙之通披見候、

（釘）

一、右大工之内拾人水口へ遣由候、五人針をぬかせ候由聞届候、其五人も水口へ可遣候、左候へ八十五人之分二候、又介かた方着到を可遣候、

一、切石百之分大津へ遣候由、何より以尤候、石に判を仕由、得其意候、

一、大津へ大工と奉行を遣、材木仕分候て、用に立ましき分わり木二させ取寄可申由、尤候儀共候、其分二可申付候、

（朽木宣綱）

（飯米）

（朽木元綱）

一、朽木殿やとい人足はん米、河内殿方被申付候由聞届候、此方にて懇二礼を申候、

（掛樋）

（梶子）

一、足代木・かけつち・手子以下相改返し候よし、尤二候〜、

一、向地へ遣候材木・人足つもり之事早々可申越候、但御給人衆へ人足やとい候処、則同心被申奉行差越被申候、今明日中二右之奉行衆可罷下候間、早々申触持せ可申候、各方返事為披見遣候、此通百姓共二も見せ可申候、

一、われ〜代官所之百姓、一人も不殘罷出候様二在々ねんを入申触、罷出候様二才覚可仕候、

一、蒲生郡人足にて不足候ハ、(野洲) やすの郡之人足家康へ申入候、急与
究候て自是可申遣候、

一、舟木・ゑかしらら下山村まで持せ付候様ニと申遣候、尚以其方に
て右之分可申談候、只一婦と申談候間、可得其意候、

一、舟之儀観音寺方堅被申付、大舟を以上候由、何方以尤候、

一、朽木殿方人足被仰付由候、殊奉行かたへ御音信之由、此方にて礼
を能々申入候、

一、大溝年寄共も切々見廻之由聞届候、

一、舟之儀出来次第つミ可被渡由、可然候、観音寺度々念を被入二付
て、舟数不入由近比尤候、

一、水口へも、はや右之分申遣候間、其方にても右通各へ可申聞候、

一、蒲生郡給人衆方返事たゞ今遣候、

一、此方御殿二敷候はんため、ぬか卅(糠)「重而申遣候へ共于今不
(最前)

来候、さいせん卅石のほせ候外二ぬか卅石入候条、早々上可申候、
不可有油断候、

一、蒲生郡人足にて不足候ハ、重而「やすの郡人足一帰やとい
(野洲)

可申候、神埼郡人足」申候、

(長束正家)

六月十四日 正家(花押影)

西川宗兵衛

間宮与左衛門

其外「」

《MEMO》

甲賀の國づくりプロジェクト 水口岡山城発信事業
歴史フォーラム「水口岡山城と豊臣家五奉行の城」
資料集

平成28年11月13日発行

編集発行 甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市甲南町野田810